

マルコ福音書およびQ資料における

「人の子」に関する一問題点

加 藤 邦 雄

四つの福音書の中最も早く書かれたと思われるマルコ福音書において「人の子」ho huio tou anthropou, The Son of Man (The New English Bible), Der Menschensohn, le Fils de l'homme なる語は以下の14カ所に使用されている。(ただし The Authorized Version によると13:34は For the Son of man is as a man……なる句で始つているが、一般には For the Son of man なる語は原典になかつたとされているので13:34は除外する。) すなわち

2:10 (人の子は地上で罪をゆるす権威をもつている)

2:28 (人の子は、安息日にもまた主なのである)

8:31 (人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえる)

8:38 (人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来る)

9:9 (人の子が死人の中からよみがえる)

9:12 (人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると書いてある)

9:31 (人の子は人人の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう)

10:33 (人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう)

10:45 (人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の生命を与えるためである)

13:26 (そのとき、太いなる力と栄光とをも

つて、人の子が雲に乗つて来るのを、人人は見るであろう)

14:21 (たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去つて行く)

14:21 (しかし、人の子を裏切るその人はわざわいである)

14:41 (時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ)

14:62 (あなたがたは人の子が力ある者の右に坐し、天の雲に乗つて来るのを見るであろう)

以上の14カ所の句を見て、容易に気付くことは、2:10と28との二つが他の十二カ所の句とその性格をいささか異にしていることである。すなわち、後者はすべてマルコ福音書8:27-30にあるペテロの告白より以後の記事であるが、前者はイエスの公生涯の比較的早い時期に属する記事であることである。したがつて、マルコ8:31以下の「人の子」は多くイエスの苦難ことに十字架の死に関連している。もちろんペテロの信仰告白以後にある「人の子」の句にも栄光の主あるいは審判者として再来する者を描いている個所がいくつもある。しかし、2:10と28とは他の12カ所の句に比してその性格がかなり相違していて、地上で罪をゆるす人の子あるいは、安息日の主としての人の子として書かれている。

イエスが日常に用いたと思われるアラム語そのもので書かれた福音書は残されていないが、アラム語とその内容がほとんど同じであるといつても過言でないシリア語で書かれた福音書は現存している。もちろん、現在最もひろく使用されているペンタと称せられるシリア語の福音書

はギリシヤ語原典から翻訳であつて、大体においてラテン語と同じ時代に訳されたであろうと推定される。また、ペンタと称される訳より幾分古いシリア語福音書が発見されたが、それもペンタより幾分古いだけであつて、翻訳であることには相違がない。そのように、シリア語福音書はギリシヤ語原典からの翻訳ではあるが、その表現の中にはイエスが用いたと推定されるアラム語の表現をしばしばそのまま思わせるものがある。そこで、念のために一応シリア訳を開けて見たい。

ギリシヤ語原典のマルコ福音書で anthropos (人) と書かれている語はシリア語訳では以下のごとく25カ所に用いられている。(但し前述した14カ所に「人の子」と書かれてある場合の「人」なる語は省略した) 1:17, 2:27, 3:28, 7:7, 7:8, 7:15, 15, 7:18, 7:20, 20, 7:21, 7:23, 8:24, 8:33, 8:36, 8:37, 9:31, 10:7, 10:9, 10:27, 11:30, 11:32, 12:14, 14:21. その中で、バル・ナシャ bar nashaなるシリア語の単数形で書かれている個所は2:27, 7:15, 15, 18, 20, 23, 8:36, 37, 10:9の10カ所であつて、ブナイ・イナシャ bnaï inasha なる複数形で書かれている個所は3:38, 7:7, 7:8, 7:21, 8:24, 8:33, 10:27, 11:30, 10:32, 12:14の10カ所であるが、バル・ナシャもその複数形であるブナイ・イナシャも「人の子」である。マルコ福音書中において、上述の個所以外の「人」 anthropos は単に「人」とシリア語に訳されている。シリア語のバル・ナシャ bar nasha はアラム語ではバル・エナッシュ bar enash であると一般にいわれているが、バル・エナッシュとも書かれるので、いずれも同じ語である。ヘブル語において、ベン・アードーム ben adam, ベン・ハアダム ben ha-adam あるいはベン・イーシュ ben ish, などという表現があるがそれは単に「人」を意味することが多い。あるいは、それらの表現は「人類の一員」を意味するとも解釈される場合があるといえよう。

かつて、Wellhausen や Klostermann はマルコ2:10および2:28の「人の子」を、ヘブル語やアラム語の用法にしたがつて単に「人」を意味するに過ぎない、と解釈した。2:10の「人の子が地上で罪をゆるす権威をもつ」なる句における「人の子」をそのまま「人」と解釈することには相当の抵抗を感ずるが、2:28の「人の子」を2:27に2回用いられている「人」と同意義に受けとることは、少なくともその文脈のみから見れば不可能ではないかも知れぬ。ただし、シリア訳においては、すでに、単に「人」 anthropos の訳としての「人の子」バル・ナシャとイエスが独自の意味で自己を指している「人の子」 ho huïos tou anthropou とを明白に区別して、後者をバル・ナーシャ bar nasha と訳さないで、同じ意味ではあるが幾分重みを付けたシリア語である、ブレイ・ディナシャ breh d-inasha なる語を用いている。これをもしもアラム語に直せば、ブラ・エナーシャー bra enasha となる。シリア語で、バル・ナーシャとブラ・エナーシャーとは意味は全く同一であるが、後者は丁寧な表現であつて、それは特別に注意を引くときに使用される。現代の表現法でいえばゴチで印刷した文字のようなものであろうか。(1)

マルコ福音書における「人の子」の用法を見る時、すでに述べた2:10と28とをもしもあえて除外するならば、それ以外の12個所の用法はいずれもイエスの死、復活、再来に言及している。人の子は必ず十字架につけられる。人の子

(1) Levy, Chaldaisches Woerterbuch (1959) S. 111 参照。Smith, A Compendious Syriac Dictionary, P. 53. "barinasha-a man, a son of man. As a title of our Lord it is generally written breh dinasha the Son of man". Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament (1926), P. 40 "bar inasha-anthropos, the genetic term for man (homo) or an individual human being. Mt. 2:27; Rom 1:23; Rev. 21:17; Adam the first human being, summing up mankind fallen, I Cor. 15:45;……" "breh d-inasha-ho huïos tou anthropou, the prophetic title used exclusively 39 times excluding parallels) in Gospels of Christ as the I deal Adam, summing up mankind restored, Mk. 2:28.

マルコ福音書およびQ資料における「人の子」に関する一問題点

はそれから三日目に復活する。人の子は再び審判者として来る。このような句を読めば、誰でも、コリント人への第一の手紙15：3—8や使徒行法10：38—43その他に見られるケーリュグマ kerygma と似た出来事を思い起こすであろう。そこで、マルコ福音書にある「人の子」の句はいずれもケーリュグマ的のものではないかと一応問題にせねばならぬ。このように、マルコ福音書における「人の子」の句がケーリュグマ的の性格をもっているのではないか、という問題の出し方をしたからとて、それが直ちに、それらの「人の子」の句の歴史性を全く否定することになるか否か、これには問題がある。ブルトマン Bultmann その他の人人は、「人の子」の句がケーリュグマ的であるところからその歴史性を否定しようとしている。そして、イエスが自己の死、ことに十字架につけられて死ぬこと、についての予言を生前から繰り返していたという。マルコ福音書の「人の子」の句はいずれも、いわゆる、事後予言 Post Event Prophecy であつて、要するに、使徒時代の教会がすでにイエスの死を過去に知つたのでそれをイエスの生前の予言として意識的にもせよ無意識的にもせよ表現したのであるという。

十字架刑についての人の子の予言が事後予言ではあるまいか、という疑問は、マルコ福音書よりもその成立が早いとされているQ資料における「人の子」の句が何よりの証拠であると論じられる。Quelle の略称であるQ資料とは、マタイ福音書とルカ福音書とに共通な部分の中からマルコ福音書を除いた残りの部分のことである。ただし、学者によつてこのQ資料の選び方はそれぞれ相違するので、Harnack, Streeter, Manson のものをなるべくルカ福音書において調和させた形で以下に掲げたい。(括弧は疑問視される句を示す)

Harnack	Streeter	Manson
3 : 7—9	3 : 2—9	3 : 7—9
	(10—14)	
3 : 16—17	3 : 16—17	3 : 16—17
	3 : 21—22	

4 : 1—13	4 : 1—16 a	4 : 1—13
6 : 17		
6 : 20—23	6 : 20—7 : 10	6 : 20—49
6 : 27—33		
6 : 35 b—44		
6 : 46—49		
7 : 1—10	7 : (1—6 a) 6 b—a	(10)
7 : 18—35	7 : 18—35	7 : 18—35
8 : 28—29		
9 : 2		
9 : 11		
	9 : (51—56)	
9 : 57—60	9 : 57—60	9 : 57—62
10 : 2—16	10 : 2—16	10 : 2—3
		10 : 8—16
10 : 21—22	10 : 21—24	10 : 21—24
10 : 23 b—24		
11 : 2—4		
11 : 9—14, 16—17, 19—20, 23—26		
	11 : 9—52	11 : 9—26
		11 : (27—28)
11 : 29—32		11 : 29—36
11 : 39		11 : (37—41)
11 : 42, 44, 46—50		11 : 42—52
	12 : 1 a—12	12 : (1) 2—12
		12 : 22—59
		12 : 22—34
		(35—38) 3 a
		—40(47—50)
		51—59
13 : 18—21,		
24 : 34—35	13 : 18—35	13 : 18—20
		34—35
14 : 11	14 : 11	
		14 : 15—24
14 : 26—27	14 : 26—27	14 : 26 : 27
14 : 34—35	14 : 34—35	14 : (34—35)
15 : 4—7		
16 : 13	16 : 13	16 : 13
16 : 16—18	16 : 16—18	16 : 16—18
17 : 1, 3—4, 6	17 : 1—6	17 : 1—6
17 : 23—24, 26—27,		

17:33—35, 37……17:20—37……17:22—37
 19:26……19:11—27……
 22:28……
 22:30……

以上のごときQ資料の中から「人の子」なる語を含んでいる句を選び出すと次のようになる。

マタイ福音書		ルカ福音書	
1)	8 : 20	=	9 : 58
2)	11 : 19	=	7 : 34
3)	12 : 32	=	12 : 10
4)	12 : 40	=	11 : 30
5)	24 : 29	=	17 : 24
6)	24 : 37	=	17 : 26
7)	24 : 44	=	12 : 40
8)	19 : 28	……	22 : 30 参照
9)	10 : 32参照	……	12 : 8
10)	5 : 11参照	……	6 : 22
11)	24 : 39参照	……	17 : 30 (2)

1) から7) までは、マタイ福音書とルカ福音書とのいずれにも発見される句であつて、Qであることに疑問がない。しかし8) —11) はマタイ福音書かルカ福音書かのいずれか一方にのみ「人の子」なる語が見出されるのみであるが、この両者は内容がきわめて近似しているもので1) —7) のごとくに=であらわさないで、「参照」なる語を付し……で結んで置いた。

このようなQ資料について、一般にはイエスとその死の苦難ことに十字架につけられることについての予言の言葉を含んでいないと論じられている。たとえば、McNeile, *Introduction to the New Testament* p 68 などでは次のようにいわれている。It is practically agreed that Q did not extend to the Passion. そこで定説となつているかの如き、このような判断が正当であるか否かについて、まずQ資料から選んだ「人の子」の句を直接に引用して見たい。

1) マタイ8:20「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらす所がない」

2) マタイ11:19「人の子が来て、食べたり飲んだりしていると、見よ、あれは食をむさぼ

る者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う」

3) マタイ12:32「人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう」

4) マタイ12:40「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう」

5) マタイ24:27「ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」

6) マタイ24:37「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう」

7) マタイ24:44「思いがけない時に人の子が来るからである」

8) マタイ19:28「人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従つて来たあなたがたもまた、十二の位に坐してイスラエルの十二の部族をさばくであろう」

9) ルカ12:8「だれでも人の前でわたしを受け入れる者を、人の子も神の使たちの前で受け入れるであろう」

10) ルカ6:22「人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたがたを排斥し、ののしり、汚名を着せるときは、あなたがたはさいわいだ」

11) ルカ17:30「人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう」

以上のように11個の句の中に、イエスが表面にあらわして「十字架」に言及したものは一つもない。それについて、ある者は次のように説明

(2) ルカノ7:30に相当するマタイ福音書の箇所はないと見る者もある。たとえば、Huck-Lietzmann, *Synopse der drei ersten Evangelien*, S. 141によると、マタイ24:37—41はルカ7:26—28と平行させてあるが、ルカ17:29—31と平行する句はマタイの中にないことになっている。しかし、最近出版されたJosef Schmid, *Synopse der drei ersten Evangelien* (1960) S. 136を見ると、マタイ24:26—27, 37—39aはルカ17:23—27と平行し、マタイ24:39bはルカ17:30と平行するように並べられてある。それで、Huck-Lietzmannのようなものに依存する論者はルカ17:30をQの中にある「人の子」句から省略するが、Schmidのごとき者による者は、これをQの「人の子」句の中に入れる。

を加える。すなわち、Q資料なるものは元来イエスの語つた語録（ロギア Logia）であつて、恐らくそれは主イエスの生前において早くも弟子たちの間でメモのごとくに採録されていたのであろう。少くとも、弟子たちの間で口から口へと伝えられたものであろう。それゆえに、イエスの生前の言葉の中に「十字架」の語が発見されなくとも不思議でない。と説明する。⁽³⁾また、ある者は、次のように解釈する。すなわち、このQ資料は前述の論者のいうように明らかに語録であつて、それは使徒時代にイエスの弟子たちから伝えられたものであろう。それは、信者たちの信仰生活、ことにその倫理的な面において教訓となり得るような語録であつたろう。その場合、イエスが十字架につけられたことと、三日目に甦つたこととは、当時のキリスト者の間ではあまりにもよく知られていた。それはあまりにも自明のことであるので、今さら語る必要はなかつた。それゆえに、このQの中に「栄光の中に再来する「人の子」は語られているが、十字架につけられることを予言する言葉は見出されないのであると。

第二の説には、われわれをして首肯せしめるものがかなり含まれているようである。しかしそれにしても、イエスの在世の時、弟子たちの間に保存されていたQ資料にイエスの苦難の思想はまったく反映されなかつたのであろうか。前述のように引用した11の句を卒直に読む時、ある程度まで苦難のイエスの姿が反映されている。すなわち「まくらする所がない」イエス。「罪人の仲間」と罵られるイエス。「言い逆らう者」に苦しめられるイエス。「三日三晩地の中にいるのであろう」イエス、人々に受け入れられないイエス。人々に憎まれるイエス。が描かれている。ことにヨナのごとくに三日三晩

地の中にあるべき人の子の姿は、十字架につけられ、葬られた者の姿である。

マルコ福音書の中に描かれている「人の子」はきわめて具体的に十字架の死を予言している。その一つ一つの句について、なお論ずべきいくつかの問題がないことはない。しかし、かりにわれわれがマルコ福音書を手にしなかつたとしても、そして、Q資料以外にイエスについて知り得る何らの資料を持ち合わせていなかつたとしても、われわれはQ資料のみによつても、なお「苦難のしもべ」としてのイエスの姿と、栄光の中に再び来るべき姿とをある程度まで知り得るのである。⁽⁴⁾

(3) Major, Manson, Wright, *The Mission and Message of Jesus* (1956) Pp. 307-308 "Along with this goes the fact that there is no account of the Passion. Various reasons have been suggested for this remarkable omission. To Sir William Ramsay it is an indication that the document was composed during the life time of Jesus. The most remarkable explanation is that there is no Passion story because none is that there is no Passion story because none is required, Q being a book of instruction for people who are already Christians and know the story of the cross by heart." Streeter, *Four Gospels*. P. 292 "The Passion and its redemptive significance could readily be taught in oral tradition. But ethical teaching implies detailed instruction which sooner or later necessitates a written document. Such a document is found in the Didache, which, obviously presupposes a general knowledge of the central facts of the Christian story. Q was probably written to supplement an oral tradition."

(4) "Professor Burkitt thinks that Q did contain a Passion narrative in spite of the absence of non-Markan material common to Mt. and Lk. in the relevant sections of those Gospels." (Major, Manson, Wright, *The Mission and Message of Jesus*, P. 307) [1964. 11. 3稿]